

引用文献は、『無量寿経』『阿弥陀経』『観経疏』『往生要集』『往生拾因』等である。それらの引用は、名利を求めて馳走する罪悪生死の凡夫の姿であり、不浄な人の身に執着を重ねる愚かさを指摘するが、それと呼応しつつ、弥陀の名号不思議を語り、絶え間ない弥陀の計らいによって、臨終には必ず往生の救いに預かるのである。

本書の全体的な文章の調子は、対句や韻を踏み、平明な和語を用いながら、耳に心地良く響く叙述を志向しているように思われる。理論的に浄土教の救済の構造を明らかにするという方法を用いるのではなく、心弱い凡夫、念仏行者として心の散乱する自己を、「ほださる」「かだまし」「まぎらかさる」等の言葉で語る。一方、そのような者を十劫の昔から救済する手立てを講じ給う阿弥陀如来のはたらきを、「こしらふ」「かまふ」「いさむ」「はかる」「すかす」「かたらふ」「たくらふ」等の言葉で表す。これらの語は普通に日常生活の中で使われる和語であるが、念仏行者の立場からみると、限らない智慧と慈悲によって衆生を救わんとする阿弥陀如来のはたらきを示す語となるのである。かかる使用例は端的に言えば、「進心」と言っているであろう。「進む」とは「ある事をしようと、はげむ、決心する」ことであり、また「高い目標に向かって努力すること」であって、念仏の行者にとって、この「進心」は臨終の往生を期して、たゆまず念仏三昧を行ずることである。

かくて「心」を奮い立たせて浄土を願生するその修行者達を『西方発心集』の著者は、上巻では「四つの品」即ち四等に分類する。また下巻では四種を「友」と呼んでいるところに、同

じ念仏行者への呼びかけがあり、そこにこの書の存在理由もあると言えよう。即ち、草庵や、あるいは妻子と共に生活をしながら、念仏中心の生活を送っている者達へ、「進む心」を確認しながら、共に浄土を目指すべく勧奨するのである。

序に「外には通世の相を示せども、内には名聞の望み胸に満つ。言には往生の事を談ずれども思ひは四方に馳す」と述べていることからして、著者は通世者として念仏修行に励む人であり、本論にあげたような語の用例が、『黒谷上人語燈録』に近いことから、比較的早い段階での法然門下ではないかのと推測が可能であろう。

『教時問答』における

「一心一心識・一切一心識」について

土 倉 宏

安然是『教時問答』（大正七五・三八九下）で次のように述べている。

法華経は一切一心識に約す。故に阿闍・弥陀は是れ他仏身、又普賢等は是れ釈迦身には非ずと云うなり。今真言宗は一心一心識に約す。故に四方の四仏、四維の四菩薩は皆大日身なりと云うなり。然るに天台の云く、心・仏・衆生は是れ三にして差別なし、只心は是れ一切の法、只一切の法は是れ心、縦に非ず、横に非ず、一に非ず、異に非ず、芥爾の一心に必ず三千を具す、と。即ち是れ今真言宗の「

心一心識の意なり。

この中で安然是法華経は一切一心識であり、今真言宗は一心一心識である、と述べ、さらに天台の「芥爾一心必具三千」は、今真言宗の一心一心識と同じである、と述べている。この安然の考えについて私見を述べてみたい。

安然是『教時問答』の別の箇所、一切一心識とは、『釈摩訶衍論』における第九識であり、真如門の差別義であり、一切衆生各識各心であり、一切諸仏各身各体である、と述べ、一心一心識とは、『釈摩訶衍論』における第十識であり、真如門の平等義であり、一切衆生一識一心であり、一切諸仏一身一体であると述べている。

一切一心識が諸法実相・開会の思想に通じる意味を持つとすれば、『法華経は一切一心識』という点は理解できる。また、今真言宗が一心一心識ということも「真如不変―大日一仏」という考え方から敷衍すれば理解できることである。しかし、安然が一切一心識（第九識）よりも一心一心識（第十識）の方が上位であることを示唆している点について、はたしてそのように一概にいえるのか、疑問を感じる。また諸仏・諸菩薩は釈迦の身と異なる他身である、とすることについても問題点があると考ええる。

まず諸仏・諸菩薩は釈迦の他身として点についてであるが、法華経で「我説燃燈仏等」「或説己身、或説他身、或示己身、或示他身、或示己事、或示他事」（大正九・四二中―下）といい、『法華玄義』で「毘盧遮那一本不異。如百千枝葉同趣一根」（大正三三・七六九中）とされることから、諸仏・諸

菩薩は釈迦の他身ではなく、法華経・久遠実成の仏の垂迹と考えられるのである。法華経に見られる開会思想（開三顯一、開近顯遠等）の特徴は、あくまでも仏と衆生との具体的関わり（三千塵点劫、五百塵点劫、また『法華玄義』の「三種の教相」がそのことを明示している）を通じた上で久遠実成の仏を導き出していることである。それは具体性を踏まえた上で、開会（開三顯一、開近顯遠）を行うという思想である。この開会の思想は、真如不変（大日一仏）から諸仏、一切衆生を展開するあり方とは方向性を異にしているものである。久遠実成の仏が明らかにされることにより、それまで説かれてきたすべての仏が久遠実成の仏へと開会され、すべての衆生が久遠実成の仏のもとで成仏の可能性が開け、それまで説かれてきたすべての教えが久遠実成の仏の教えとして新たに蘇生したのである。ここに法華経を能開の経とする考え方が成立する。そうであるならば、一心一心識は一切一心識なしに意味を持つものではないはずである。安然にその点を考慮することがあったのか否か、今後検討してみたい。

次に安然是、今真言宗は天台の「芥爾一心必具三千」と同じである、としている。「芥爾一心必具三千」は『摩訶止観』・『止観輔行伝弘決』によって展開された所謂「一念三千」のことであるが、一念三千は法華経の開会思想、諸法実相の思想を踏まえてのものであり、真如不変的視点からのみ直ちに導き出されるものではない。したがって今真言宗の一心一心識と「芥爾一心必具三千」が単純に同じとはいえないはずなのである。この点についても安然の思想を精査していきたい。